東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

児童・青年の性役割意識に関する教育心理学的研究

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 1993-12-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/736

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

児童・青年の性役割意識に関する教育心理学的研究

藤　田　主　一

I．はじめに

人間の意識や行動に関する事象を問題にする場合，心理学ではそれが量的・質的にどの発達段階（developmental stage）に生起し，構造化される現象なのかに関心を持つことが多い。

発達段階という概念は，人間に固有な諸種の発達的変化が，単なる時間的な量的増減によるものだけではなく，質的に構造化された発達的差異を問題する立場など，研究上の観点や目的によって具体的ないくつかの区分が提出されている。本研究で扱う児童期，青年期という区分の方法は，生活形態や教育体制などの特徴を基準とした社会的慣習による分類である。

児童期（childhood）は，おおよそ6歳から12歳ころまでの小学校時代である。家庭生活が大部分の乳児期や遊びが中心の幼児期と比べ，児童期は身体的，精神的，社会的にも安定した時期である。小学校高学年になると，身体的には思春期的変化の徴候が現われ始め，第二次性徴という性的な成熟現象が出現してくる。青年期（adolescence）は，思春期に引き続き成人期に至るまでの時期にあたり，年齢的な側面に対応させると，中学校の制服を着る12歳ころから大学を卒業して社会へ巣立つ22～24歳ころまでのおおよそ10年間を指すことが多い。青年期にいる人達にとって，身体的・精神的な成長とともに，同性や異性に対する量的・質的な関わり方への葛藤が増加する。また最近では，乳幼児の身体的発達や児童・青年の性的成熟が促進されていることに注目が集まり，特に精子の生産や初潮の始期にみられる成長加速現象や成熟前傾現象が顕著である。児童期が短縮され思春期・青年期が早く開始されているのである。それに伴って，性に関する興味や関心が増加していると予想される。本研究においては，身体的な性の問題ではなく，精神発達としての心理的な性について追究しようと思う。

II．性役割研究の背景

1．性差の概念

男女間の性差（sex difference）は，生物学的な性差と心理学的な性差に区別される。生物学的な性差は生理的・身体的に顕著で生得的である。男女の性別はすでに個体発生の時点で決

定され，それに基づいて男女それぞれの性腺や性器などが分化し発達する。これらの中には，たとえば性器の違いのように誕生時から明瞭に弁別できる性差ばかりでなく，思春期から青年期にかけて発現する第二次性徴といわれるものまで，生物学的といっても必ずしも男女間でその発達が一様ではない。第二次性徴として現われる生理的・身体的な変化には，男性の場合の精通現象や男性的体格，女性の場合の初潮現象や女性的体格など，実に多くの特徴が存在しているのである。いずれにしても，生理的・身体的な性差は，人間の性を生物として捉えた生物学的な性差を意味し，それは時代あるいは文化を越えて普遍的に認められるものである。

これに対して，心理学的な性差は心理的・行動的に認められる性差である。それは生物学的な次元と異なり時代や文化を越えた普遍的な次元のものではなく，生後のさまざまな環境や経験によって形成されるので習得的である。そこには，個人が生活していく社会や，その時々の文化的形態，さらに時代的背景が大きな意味を持つために，個人は広く社会全体の期待に沿う形で性に基づく役割を形成していくのである。生後間もなくから命名に始まり，服装や髪型，玩具や遊びなどを通して，それぞれの性に期待される働きかけが行われる。このような意味において，心理学的な性差は個人を取り巻く多種多様な社会環境の影響から獲得され，固定化されていくものと考えられる。もちろん，性差に関わる問題は個人の発達過程を考察するだけでなく，その時代や社会における価値観や教育観の基準も忘れてはならない。

たとえば，1904年（明治37年）12月に発刊された大村仁太郎編の教育寓話『我子の悪徳』[1]の中で，東京のある高等女学校の倫理教室で，生徒に対して老先生が“女子”の役割を次のように述べている。

「皆さん！，皆さんは心を美しくすると云う考へが肝腎です。身分不相應に外觀の美を裝ふが如きは，無論罪惡の一として避けなければなりません。女子は兎角に裝飾に心を用ゐるものであるから，皆さんは努めて其邊の事に注意しなければいけません。縱令美くしき衣裳に外觀を飾るとも，心が美くしくなければ何にも役に立ちません。如何に青紫紅白に美觀を極めても造花は何処までも造花です。香もありません。薫もありません。隨て美の神髄を極むる事が出來ません。野に咲く百合の花は，縱令茨の中に咲いて居ても天地の美を極めて居ります。皆さんが女子として他日人に重んぜらるゝ所以は，皆さんの指頭に金剛石が輝いて居る爲めではありません。只心の美しい爲めなのです。即ち節操，愛情，慈悲，柔和などの徳性を具備て居る爲めなのです。如何に千萬金の裝飾でも，之れは畢竟浪費の不徳を代表するに過ぎないのです。皆さんも決して斯かる不徳に尊敬を拂はないでしやう。如何に脂粉を施しても，天然の健康より出づる紅の頰は，遙かに人間の美を増すものであります。斯く觀じ來れば裝飾は人間に毫も益する所がありません。否，却て人間の品位を下げるに過ぎないものと思はれます。皆さんも能く女子の守るべき道を修め，美服を纏ひ外觀を修飾する事などに心を傾けない樣になさるのが必要です。斯くすれば世間の人も皆さんを尊び敬ふやうになります。皆さんが是非とも左樣心掛けられん事を私は希望致すのであります。」

このような例を見ても，そこに単なる美徳や躾以上のものが読み取れる。おそらく，性に応

じた役割が時代によって変化するとしても，女性が自らの性と生殖をめぐる固有の役割から解放されることはあり得ない。また，性についての役割が社会的・文化的なものであるといっても，生理的・身体的な基盤を無視するわけにはいかない。このことを考えると，性についての役割（性役割）は生物学的な根源を持つとともに，社会的・文化的な方向性を持つものと定義してよいであろう[2]。

2．性役割の概念

さて，ここで性役割（sex role）という心理学上の概念を考えてみよう。上述したように，男性と女性という性の違いを「性別による役割」とすれば，ここで扱う性役割という概念は，この性別役割とはかなり性質を異にする。東・小倉[3]の要約を挙げておこう。

(1) 性別役割は生物学的性差に必然的に付随するものであるのに対し，性役割は生物学的性差を基準にしてはいるが，その必然的な所産ではない。

(2) 性役割は，性別役割に何らかの価値づけが介入したものである。

(3) 性役割は，人間が生後の環境の中で学習していくものである。

この要約は，人間が性役割という観点からみると誕生した時には中性であり，誕生した時の外見的な形態の差によって性役割を与えられて育てられること，つまり性役割は社会化の過程の一部という見方ができる。さらに，福富[4]は性役割の定義について，「役割という概念を性に当てはめたものが『性役割』である。すなわち，男性と女性を社会の中の一つの地位としてとらえ，それぞれの性に対して社会が期待する態度や行動様式の総称を性役割と考えるのである」と述べている。このような定義に関する諸説に対して，性役割といってもそこにはいくつかの側面が含まれているので，それらを適切なレベルに分けて考察する必要があるという指摘は多い。飯野[5]は次のようにまとめている。

Lynn[6]は，性役割を「性役割選好（sex-role preference）」，「性役割採用（sex-role adoption）」，「性役割同一性（sex-role identification）」の3つの側面に分けた。性役割選好とは，男性あるいは女性にふさわしいとされている行動をしたいと望む傾向である。性役割採用とは，性別化された行動を実際に行うことである。性役割同一性とは，自分を男性あるいは女性と結びつけることであり，男性あるいは女性を特徴づけるような無意識的な反応のことである。

Biller[7]は，性役割を「性役割選好」，「性役割採用」，「性役割志向（sex-role orientation）」に分けた。前2つはLynnの考え方を基にしている。性役割志向とは，自分自身の男あるいは女らしさについての評価のことである。

柏木[8]は性役割概念を「性役割行動」，「性役割観」，「性役割同一性」の3つの側面に分類した。性役割行動とは，自分の性に対して社会が期待している行動や性格・態度などの特徴を，実際にどれだけ身につけているかという性役割の実現度のことである。性役割観とは，性役割に関する価値観を形成することである。また，性役割同一性とは，社会的な性役割期待や自己

の性役割観に自分自身を照らし合わせた時の自分自身に対する男らしさ・女らしさの自己評価・自己認知のことである。

東・小倉[3]は，性役割を「性役割パーソナリティ」，「性役割観」，「性役割受容性」の3側面に分けている。性役割パーソナリティとは，社会から性に応じて期待される一連のパーソナリティ特性であり，行動レベルに限らず，意識のレベル（興味や信念）に及ぶものである。性役割観とは，性役割に対する個人の評価を指す。性役割受容性とは，自分の性別に従って期待されている役割をどの程度受容しているかの測度のことである。

飯野[5]は，上記のように分類され提出された性役割の側面を，それが扱っている対象に従って再度まとめ直している。第1に性役割の認知的な側面（Cognitive），第2に性役割の現実的な側面（Real），第3に性役割の自己概念の側面（Self-concept）である。**表1**には，これら3つの側面と各研究との関連が示されている。これを「性役割のBIG-THREE」と呼ぶことができるだろう。

表1　性役割の3つの側面（飯野）

研究者	側面		
	Congnitive	Real	Self-concept
Lynn	性役割選好 (sex-role preference)	性役割採用 (sex-role adoption)	性役割同一性 (sex-role identification)
Biller	性役割選好 (sex-role preference)	性役割採用 (sex-role adoption)	性役割志向 (sex-role orientation)
柏木	性役割観	性役割行動	性役割同一性
東・小倉	性役割観	性役割パーソナリティ	性役割受容性

3．性役割研究の確立

男性・女性としての性役割は，誕生したばかりの子どもに備わっている訳ではない。彼らが生まれたその社会の文化や親の期待などの諸要因に影響を受けながら，それらを吸収していく過程から身につけていくものである。例えば，幼児期から児童期にかけては，家庭では社会性の学習や社会的行動に対する親のしつけの形を通して習得される。また思春期から青年期にかけては，自我意識の目覚めから自我の確立へとスタートする時期である。従って児童期までに習得してきたさまざまな生活習慣や行動を，自分の立場で見直すようになる。男らしさや女らしさという性役割についての獲得（性的型づけ）も，外側からの吸収ではなく内側からの視点で調整し直し始めるのである。発達的に見たこのような性役割の形成過程について，福富[9]は柏木[8]の研究に基づく3つのレベルを次のように説明している。

第1は，性役割行動の習得である。これは前述のように，男性として女性として自分の性に社会が期待しているさまざまなステレオタイプの役割行動の習得のことである。多くは幼い子

ども時代から主として親や周囲の環境（友だち，慣習，教育など）の影響を受けて身につけていくものである。男らしさ，女らしさといった問題も周囲のしきたりを殊の外取り入れて形成していく段階である。福富[9]は「子どもの世界というものは，ある意味では非常に保守的であるともいえよう。従来からの習慣に対してかたくなにそれを守ろうとする。自分なりの判断の基準が定まっていないから，個個の場面で自分なりに判断していくというよりも，定められている基準に従うより他にないのかもしれない」と述べている。

第2は，性役割観の形成である。これは，性についての望ましい役割像の認識であり，性役割についての自分なりの価値観の形成である。つまり，性役割をどのように捉えるかという自分なりの視点の形成である。柏木[8]は，中学生から大学生までを対象にして，青年たちが性別役割をどのように受けとめているかを調べた。人間の特性を示す形容詞（背が高い，活発な，積極的な，おしゃれな，健康な，社交的な，など）リストに対して，それらの特性が男性にとって，あるいは女性にとってどの程度望ましいものかを7段階評定させた。その結果，「背が高い」「活発な」「意志強固な」「仕事に専念する」が男性として望ましい特性であると高く評価され，「行儀がよい」が女性として望ましい特性と評価された。また，「融通性のある」「健康な」などの特性は，男性・女性の望ましさに差がなかった。青年の性と年齢による相違については，

(1) 男子では，男女両役割の文化の程度に著しい年齢差があり，年少段階ではわずかな特性でしか性役割は区別されておらず，未分化である。年長になるにつれて，男・女両役割はこまかく明瞭な差をもって分化してゆく。

(2) 女子では，男・女両役割を識別するのに有効な項目特性数に関しては年齢差はみられない。しかし内容的にみると，何が基準となって識別されているか，女性役割特性が積極的にとらえられているか，などの点で，年長段階と年少段階との間には相違がある。

という指摘がなされている[9]。

さらに，因子分析の結果，3因子が抽出された。第Ⅰ因子は「頭のよさ」「高い学歴」「理性的」「政治への関心」などに関する『知性の因子』である。第Ⅱ因子は「従順さ」「謙遜」「優美」「かわいらしさ」「デリカシィ」などに関する『従順と美の因子』である。第Ⅲ因子は「経済力」「意志の強さ」「活動性」「積極性」などに関する『行動力の因子』である。第Ⅰ因子と第Ⅲ因子は，女性に対してよりも男性に高く期待され，反対に，第Ⅱ因子は女性に高く期待されている結果になった。男性の役割が知的で行動力があることに対応し，女性の役割が従順でかわいらしいことに対応しているのである。**図1**は，3つの因子の因子得点を中学，高校，大学ごとに男女で比較したものである。男性役割因子では，第Ⅰ因子の中学生を除いて因子得点に差が認められない。第Ⅲ因子ではどの年齢段階も「行動力」についてはこの特性が女性よりも男性に望ましいと評価している。一方，女性役割因子では，どの年齢段階も男性の方が女性よりも従順や美という特性を女性に望ましいものと考えている。これは，女子青年が自分の性役割として従順や美しさという特性を認めることに消極的なことを示している[9]。

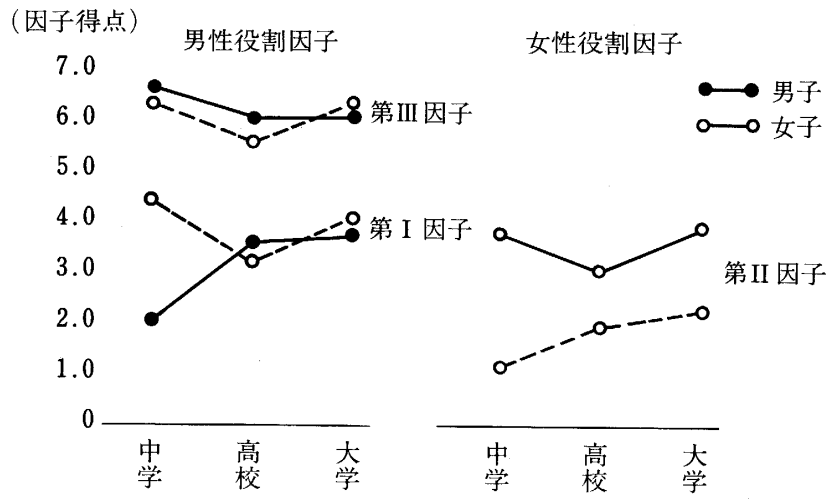

図1　因子得点のグループ別比較（柏木）

第3は，性役割同一性の確立である。柏木[8]は性役割の同一性が性役割の発達の中でも個人の存在の安定性や適応につながる基盤をなすという意味で，特に重要であると述べている。性役割行動を習得し，男性あるいは女性としての特徴を身につけ，自分自身の性役割観を形成した時に，初めてこの性役割同一性が明確になるというのである。青年は社会の性役割期待や自分自身の性役割観に照らして，自分がどの程度男らしく，女らしいのかを評価していく。その結果浮かび上がった自己概念が性役割同一性といわれるものである。

ところで，男性と女性の性役割観の変化を発達的に考察すると，男性と女性が，同性または異性に対して行う評価の遂行に性差が認められる。児童期においては，男性も女性も同性を高く評価する傾向にあるが，思春期から青年期へ移行するに従い，男性を積極的に，女性を消極的に評価し始め，特に女性の方が同性よりも異性をより積極的に評価するようになる。さらに男性の性役割観の発達が比較的単純に進むのに対し，女性の性役割観の発達は複雑な経過をたどるようである[3]。児童期から思春期にかけて，男性は伝統的な性役割観を容易に受容するのに対し，女性は男性ほどそれを容易に受容していない。柏木[10]も述べているように，親が躾という形で強調した場合，男性は伝統的な性役割観に合致した子どもに成長するが，女性に同様の躾をすると，伝統的な性役割観とは逆のものを持って成長するようになる。つまり，男性が男性役割を積極的に受容しているのに対し，女性は女性役割を否定的・消極的に受容し，伝統的な性役割と自己の期待する性役割との間にズレを感じている。そして男女とも，女性役割を男性役割より低く評価している。

ここで，性役割の受容性に関わる調査結果を取り上げてみよう。例えば，1984年に公刊された『東京都小・中・高校生の性意識・性行動に関する調査報告』[11]の中に「自己の性認識」に関する項目が含まれている。質問内容は「あなたは，自分が男や女に生まれてきたことをどう思っていますか」というもので，小学校5年生から高校3年生までの男女，計8,627名が回答している。**図2**は小学生，**図3**は中学生，**図4**は高校生の回答結果をまとめたものである。自

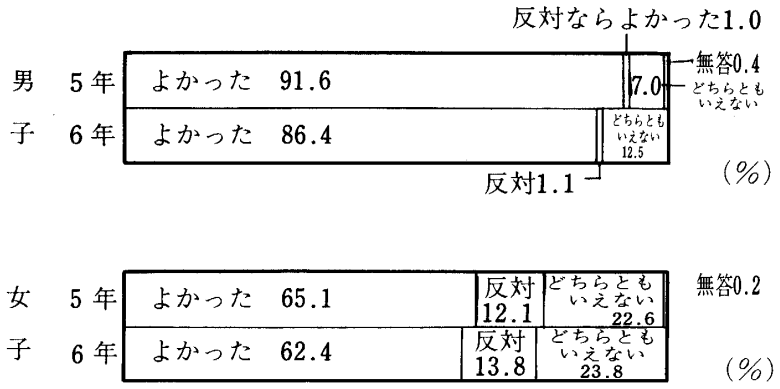

図2 「あなたは，自分が男や女に生まれてきたことをどう思っていますか」（小学生）

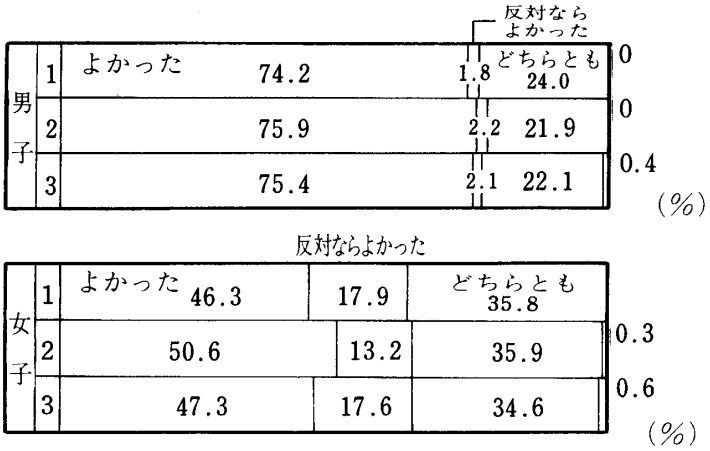

図3 「あなたは，自分が男または女に生まれたことをどう思っていますか」（中学生）

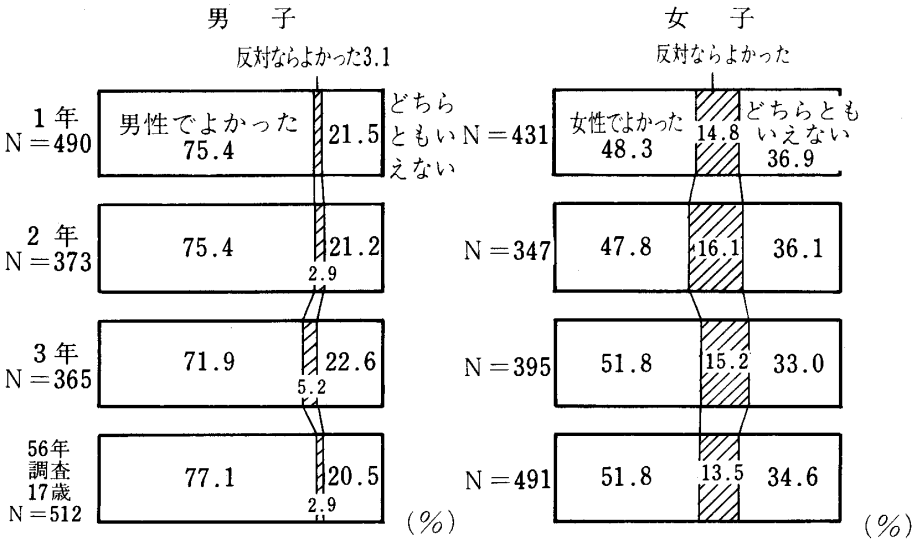

図4 「あなたは，自分が男性または女性に生まれたことをどう思っていますか」（高校生）

己の性役割を肯定する比率を以下に示しておこう。ただし，（　）内は自己の性役割を否定した比率である。

(1) 小学生5年　男子91.6％（1.0％），女子65.1％（12.1％）
　　小学生6年　男子86.4％（1.1％），女子62.4％（13.8％）
(2) 中学生1年　男子74.2％（1.8％），女子46.3％（17.9％）
　　中学生2年　男子75.9％（2.2％），女子50.6％（13.2％）
　　中学生3年　男子75.4％（2.1％），女子47.3％（17.6％）
(3) 高校生1年　男子75.4％（3.1％），女子48.3％（14.8％）
　　高校生2年　男子75.4％（2.9％），女子47.8％（16.1％）
　　高校生3年　男子71.9％（5.2％），女子51.8％（15.2％）

この調査結果からいろいろな事実が浮上してくるが，男女間で比較すると，どの学年においても男子の方が女子に比べて肯定的に自己の性役割を受容している。また，反対に否定的な性役割の受容に関しては女子の方に高い。男子と女子とのこの間の差が何を意味しているかについては，上述の通り，特に日本社会における性役割の形成についての文化や時代の要請などが考えられるだろう。

個人が，どの程度の男性役割（男らしさ：masculinity）あるいは女性役割（女らしさ：femininity）を備えているかを測定する尺度を，それぞれの頭文字を取ってM－F尺度というが，過去に開発されたこの尺度を用いて，性役割のステレオタイプが測定されてきた。当初，男性役割と女性役割が単一次元の両極性に位置するものと考えられていた。つまり，男らしさと女らしさは対立するものであり，男らしさの反対が女らしさであるという発想である。このような立場からの諸研究に対して，Bem[12]は性役割を二次元的に捉えようとした。男らしさと女らしさとは，対立する概念ではなく独立した次元であるというものである。個人が両方の特性を持ち得ることが十分に考えられるのである。上記の一次元的に対極しているとする立場に比べて，明らかに広い性役割概念である。“非常に男らしい―非常に男らしくない”“非常に女らしい―非常に女らしくない”という程度の二次元の組み合わせから，4種類のタイプが生まれる。先の福富[9]は，この4つの性役割のタイプを次のように解説している。

(1) 両極的タイプ：男らしさの次元と女らしさの次元でともに高い値を持つ人。例えば，独立的で自信があり，意思決定も速やかに行い，圧力にも耐えられる特性を持つが，一方で繊細な神経と情緒的感受性を持ち，他人に気を配るといった人間関係にも敏感であり，優しい気持ちの持ち主である。
(2) 男性的タイプ：女らしさの次元よりも男らしさの次元の値が高い人。例えば，他人の思惑を考えて行動をためらうことなく，自分の考えを貫こうとする人。人間関係よりも目的を達成することに精力を注ぎ，攻撃的な行動も厭わない人である。
(3) 女性的タイプ：男らしさの次元よりも女らしさの次元の値が高い人。例えば，繊細な神経と情緒的感受性が豊かで，自分の考えを押し通すことよりも，周囲に気を配る人。自分

から何かを積極的に行うよりも，消極的に他人に従う人である。

(4) 未分化タイプ：男らしさの次元と女らしさの次元でともに低い値を持つ人。例えば，自分の考えに従って積極的に行動するのでもなく，かといって周囲に気を配るわけでもなく情緒的感受性も乏しい人である。

Bem[12] は性役割の二次元モデルを仮定した BSRI（Bem Sex-Role Inventory）を作成し，男性役割と女性役割を兼ね備えた「両性具有性（androgyny）」（両極的タイプ）の人が最も適応に富んだ人物であることを指摘している。いずれにしても，性役割研究は今後の成果を期待されるところが大きい分野であると考えられる。

Ⅲ．研　究　Ⅰ[13]

【研究の目的】

発達の加速現象に伴って，児童の身体的成熟が今日急速に進んでいる。性差についての意識も学童期後半からはっきりと見られる。思春期的徴候（第二次性徴）の出現が加わるにつれて児童自身が“性”という存在をどのように認識するようになるのだろうか。ここでは，自分自身の性（同性）や異性に対する性役割観を捉えることを目的にする。

【研究の方法】

1．調査対象者　埼玉県内の公立小学校の5年生169名（男子89名，女子80名），6年生163名（男子77名，女子86名）の合計332名である。

2．調査材料　調査の内容は，概ね以下の通りである。

(1)あなたは「男の子」または「女の子」に生まれてよかったと思いますか。

(2)あなたは今度，生まれ変わるとしたらどちらの性になりたいと思いますか。

(3)あなたはどんなときに「自分は男の子だ」「自分は女の子だ」と思いますか。

(4)あなたは「男の子だから」「女の子だから」といって得をしていることがありますか。

(5)あなたは「男の子だから」「女の子だから」といって損をしていることがありますか。

(6)あなたは「男の子はいいな」「女の子はいいな」と思うことがありますか。

(7)あなたは「男の子でなくてよかった」「女の子でなくてよかった」と思うことがありますか。

上記質問項目の中で，(1)〜(2)，(4)〜(7)には3件法の回答が用意されている。また，すべての質問項目に，自由記述の欄が設けられている。

3．手続き　調査は小学校に依頼し，5年生と6年生の各教室で学級担当教員が質問用紙の配布，回収を行った。

【結果と考察】

1．性受容と性再生

表2 は男子，**表3** は女子が自分の男性性役割，女性性役割をどの程度受容するか否かをまと

表 2　男子児童による男性性受容の方向

学　年	肯定	否定	不明	合計
5 年生	69 (77.5 %)	0	20 (22.5 %)	89
6 年生	58 (75.3 %)	0	19 (24.7 %)	77
全　体	127 (76.5 %)	0	39 (23.5 %)	166

表 3　女子児童による女性性受容の方向

学　年	肯定	否定	不明	合計
5 年生	43 (53.7 %)	3 (3.8 %)	34 (42.5 %)	80
6 年生	32 (37.2 %)	15 (17.4 %)	39 (45.4 %)	86
全　体	75 (45.2 %)	18 (10.8 %)	73 (44.0 %)	166

めたものである。男子と女子において学年を変数として比較してみると，男子では男性性受容の選択が学年を問わず高率であり，男性性否定はゼロであった。これらの回答分布は有意ではなく（$\chi^2=0.11$，$df=2$，n.s.），男子は学年を越えて自身の性を受容する傾向の強いことが分かった。一方，女子は女性性を受容する率が 5 年生よりも 6 年生に低く，反対に女性性を否定する率が高くなる。この関係は有意な差（$\chi^2=9.85$，$df=2$，$p<.01$）になって表われている。また，男子と女子を変数として比較すると，5 年生（$\chi^2=12.34$，$df=2$，$p<.01$），6 年生（$\chi^2=29.36$，$df=2$，$p<.01$）で，学年においても男子と女子の性受容・否定に差が存在している。自身の性役割を受容する理由は，男子では 5 年生「野球ができる」「暴れられる」「好きなことができる」など，6 年生「トイレが楽」「体力がある」「遊ぶ物がたくさんある」などを挙げ，また「男は偉い，女より優れている」ことを強調し，学年とともに女性性役割を低く評価している。女子では「髪の毛をのばせる」「おしゃれができる」などといった特性を各学年とも受容の理由に挙げている。女性性役割を否定する理由の中に，6 年生になると「生理がある」「赤ちゃんを産む」が増える。これは身体的性徴が発端になっているのかもしれない。

表 4 と **表 5** は，生まれ変わるときの「性―再生」の結果をまとめたものである。表からも明らかなように，5 年生（$\chi^2=31.60$，$df=2$，$p<.01$），6 年生（$\chi^2=36.57$，$df=2$，$p<.01$）となり，ここでも有意な男女差が認められた。すなわち，男性は同性選択率が高く，異性選択率は低い。5 年生は「野球・サッカーなどのスポーツができる」など，6 年生は「今の生活に満足している」「今が楽しい」などの理由を挙げて，将来も男性がよいと回答している。女子の場合は，同性選択率が男子に比較してかなり低くく，また同性・異性・不明者の率

表 4　男子児童による性―再生の方向

学　年	肯定	否定	不明	合計
5年生	69 (77.5％)	6 (6.8％)	14 (15.7％)	89
6年生	53 (68.8％)	2 (2.6％)	22 (28.6％)	77
全　体	122 (73.5％)	8 (4.8％)	36 (21.7％)	166

表 5　女子児童による性―再生の方向

学　年	肯定	否定	不明	合計
5年生	30 (37.4％)	29 (36.3％)	21 (26.3％)	80
6年生	24 (27.9％)	29 (33.7％)	33 (38.4％)	86
全　体	54 (32.5％)	58 (35.0％)	54 (32.5％)	166

がほぼ1／3ずつの割合になっている点は，女子が男子に比べて自分自身の性に幾分かの戸惑いを感じている証左であろう。同性に対する疑問が噴出し始めているとも考えられるが，「女子は一度やったから，今度は男子を経験してみたい」という理由が5年生（67.9％），6年生（53.3％）ともに半数を越えている点を考慮すると，女子特性の否定というよりも男子特性へ関心が移ってきたと解釈されよう。

2．性の自覚

ここで，自分を「男子」あるいは「女子」として身体的・精神的に自覚する根拠は何かについてまとめることにする。**図 5** は5年生，6年生の結果をあらかじめ設定されたカテゴリーを用いて分類したものである。5年生では男子が「各種のスポーツをしている時」「ケンカをしている時」などのいわゆる男性的な行動特性を挙げ，女子が「鏡を見る時」「髪の毛の手入れをしている時」「おしゃれをしている時」などのいわゆる女性的な行動特性を，それぞれ大きな理由に挙げている。また女子は「料理をしている時」「母親の手伝いをしている時」などの女子に期待される行動を実行している時を意識しているらしい。ただ，男子では「トイレの時」「風呂の時」などに自覚する身体的な側面を，6年生になるとそれまで以上に男性性を意識するきっかけにしているようである。

3．性のプラスとマイナス

児童は，性役割を“得―損”の水準で評価した場合にどんな傾向を示すのだろうか。**表 6** は

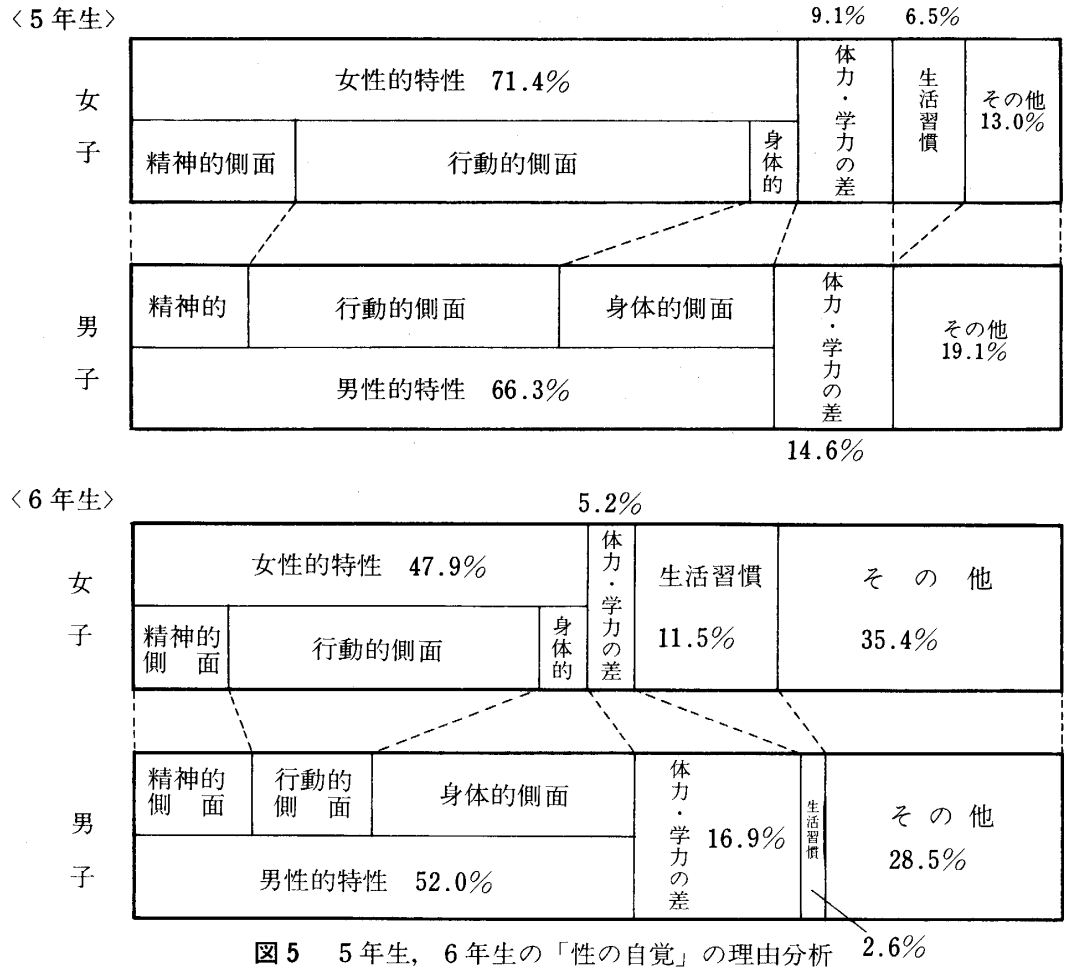

図5 5年生，6年生の「性の自覚」の理由分析

プラスに評価する結果である。男子と女子を学年で比較してみると，5年生（$\chi^2=0.04$, $df=1$, n.s.）でも6年生（$\chi^2=0.88$, $df=1$, n.s.）でも有意な性差は認められなかった。同様に，男子を学年間（$\chi^2=0.10$, $df=1$, n.s.）で比較しても，また女子を学年間（$\chi^2=0.19$, $df=1$, n.s.）で比較しても有意な差ではなかった。このことから，性のプラスの方向では“得”をしていると感じることは少ないと見ているものの，学年間，男女間に差異のないことが明らかになった。その理由を分析すると，5年生の男子では「スポーツなどの運動がで

表6 児童による性のプラスの側面

学年	男子		女子		合計	
	ある	ない	ある	ない	ある	ない
5年生	31 (34.8%)	58 (65.2%)	29 (36.3%)	51 (63.7%)	60 (35.5%)	109 (64.5%)
6年生	25 (32.5%)	52 (67.5%)	34 (39.5%)	52 (60.5%)	59 (36.2%)	104 (63.8%)
全体	56 (33.7%)	110 (66.3%)	63 (38.0%)	103 (63.0%)	119 (35.8%)	213 (64.2%)

表7　児童による性のマイナスの側面

学　年	男　子		女　子		合　計	
	ある	ない	ある	ない	ある	ない
5年生	11 (12.4％)	78 (87.6％)	12 (15.0％)	68 (85.0％)	23 (13.6％)	146 (86.4％)
6年生	20 (26.0％)	57 (74.0％)	14 (16.3％)	72 (83.7％)	34 (20.9％)	129 (79.1％)
全　体	31 (18.7％)	135 (81.3％)	26 (15.7％)	140 (84.3％)	57 (17.2％)	275 (82.8％)

きる」22.6％,「～する体力がある」19.4％,「堂々と行動できる」6.4％などが主な根拠なのに対し，女子では「特別扱いをしてくれる」34.5％,「いろいろな物をもらえる」24.1％,「親切にされる」20.7％などで，そのほとんどが受動的な内容である。男子については，6年生でもほぼ共通であるが，その他に「態度や言葉」12.0％がいくらか逸脱しても許される利点を挙げている。6年生の女子は，一般に男子に要請されることを「～しなくて済む（力仕事，荷物運びなど)」と認めると同時に,「親（特に父親）や教師から何かと特別扱いを受ける」41.2％ことに対して，自己の女性性をプラスの方向と判断するようである。

次に，自身の性役割にマイナスの評価を与える結果を**表7**にまとめた。上記のプラスの側面と同様に男女を学年間で比較してみると，5年生（$\chi^2=0.25$, $df=1$, n.s.），6年生（$\chi^2=2.37$, $df=1$, n.s.）ともに有意な差は見られなかった。また，男子を学年間で比べると5％水準で有意差があった（$\chi^2=5.04$, $df=1$, $p<.05$)。男子は学年が上がると男子でいることにややマイナスの意味を含めるようになってくる。女子の回答傾向には差は存在しなかった（$\chi^2=0.05$, $df=1$, n.s.)。男子は「男だからという理由で力仕事をさせられる」72.7％,「女子は優遇されすぎる」27.3％の点に，不満とも思える被差別的意識を抱く。これに対して，女子が性にマイナスのイメージを与えることは，5年生で「家事・手伝いの強要」33.3％,「男子にいじめられる」25.0％などが中心を占めているが，6年生になるとこの「家事・手伝い」以外に,「礼儀作法の強要」が加わり，さらに「生理的なハンデ」「出産に対する不安」という身体的な性別役割意識が現われてくる。

4．異性に対する羨望と戸惑い

図6に示したように，男子において学年間に有意な差（$\chi^2=75.85$, $df=2$, $p<.01$）が認められる。即ち，6年生になると圧倒的に女子の種々の役割に対して羨望の気持ちを持たない傾向が急増するのである。それは同時に，男性役割を絶対的に容認することに結びつくのであろう。女子の結果は，生まれ変わる時の異性選択の比率と合わせて考える必要があると思われる。5年生から6年生へと進むにつれて“男子のよさ”を認める傾向（$\chi^2=4.86$, $df=2$, $.5<p<.1$）が高まる（**図7**)。反対にそれを否定する率は減少していく。「トイレが簡単」

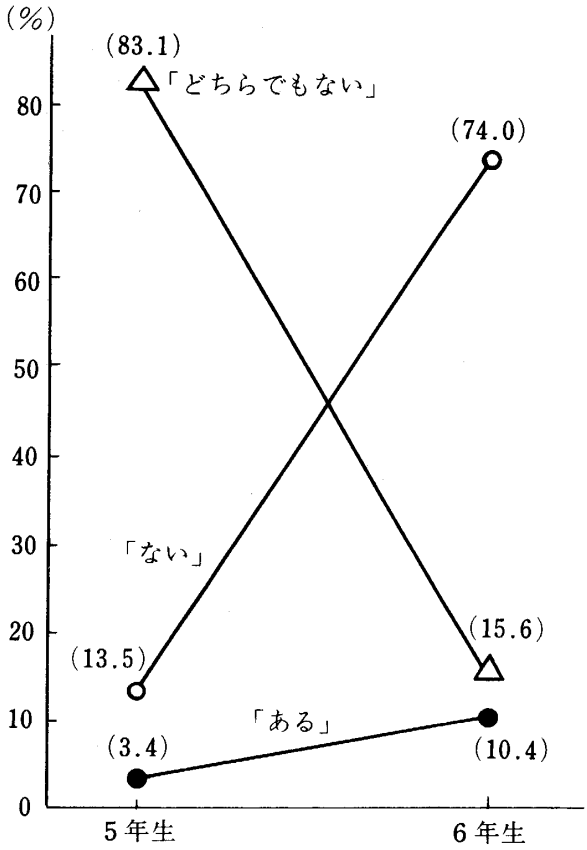

図6　男子から見た女子への羨望

「生理や出産がない」「運動が上手」などが理由である。5年生の男女間（$\chi^2=63.46$, $df=2$, $p<.01$），6年生の男女間（$\chi^2=30.25$, $df=2$, $p<.01$）には有意差が存在し，意識に違いが見られた。

一方，異性に生まれなかったことを肯定（異性でなくてよかった）する評価結果を**図8**と**図9**にまとめた。回答結果に男子の学年間（$\chi^2=4.04$, $df=2$, n.s.），女子の学年間（$\chi^2=5.56$, $df=2$, n.s.）ともに有意差はなかった。5年生の男女間（$\chi^2=7.81$, $df=2$, $p<.01$）には有意差があったが，6年生の男女間（$\chi^2=0.75$, $df=2$, n.s.）には認められなかった。図からも明らかなように，男子と女子の選択比率が逆クロスになっている点が興味深いところである。女子の中には男子に要請された社会的責務を，自分が女子であるが故に免れる利点を挙げる者が，学年を追って出

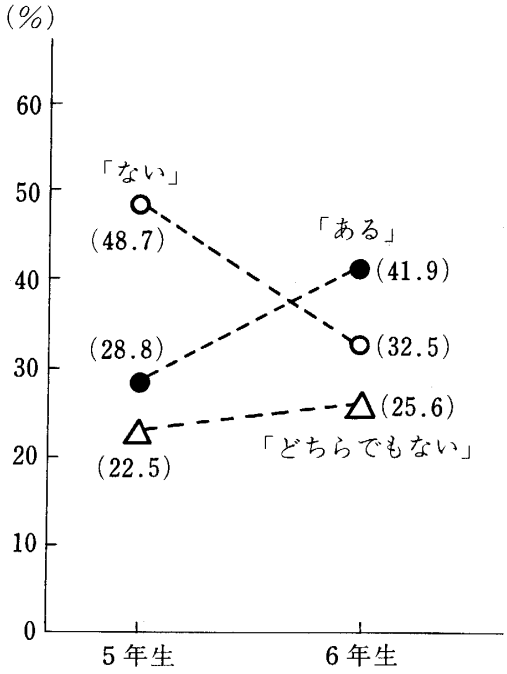

図7　女子から見た男子への羨望

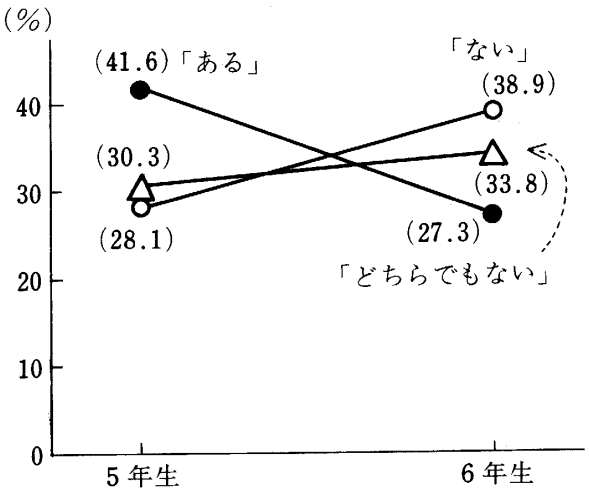

図8　男子から見た女子への戸惑い

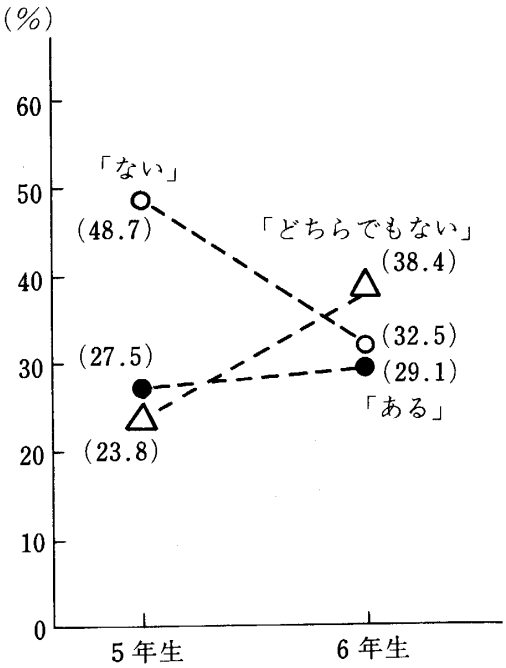

図9　女子から見た男子への戸惑い

現し始めていることを強調しておきたい。

Ⅳ．研　究　Ⅱ[14)]

【研究の目的】

ここでは，研究Ⅰに続き女子中学生の性役割意識について調査した。思春期から青年期に移行する女子中学生を取り上げることにより，小学校高学年児童の性役割意識に比べて，どのような特徴を示しているのか，その推移を見守りながら実態を明らかにしたい。

【研究の方法】

1．調査対象者　　東京都内の私立女子中学校に通学する女子生徒で，最終的な対象者は1年生から3年生までの各学年230名ずつの合計690名である。

2．調査材料　　研究Ⅰと同様の設問項目であるが，対象が女子である点を考慮した。また以下の2つの設問を追加し，全体で9種の設問からなる調査用紙を作成した。

(1)あなたは「女子だから」といって親から特別にさせられたことがありますか。

(2)あなたは「女子だから」といって親からさせてもらえなかったことがありますか。

3．手続き　　上記9項目に最小限のフェイスシートを加えた質問票を作成した。調査は各学年ともクラス単位で実施し，また実施にはクラス担当の教員があたった。調査用紙が回収された後，未記入等を取り除いたものの中から，無作為に各学年それぞれ230名分が抽出され以後の分析対象に当てられた。

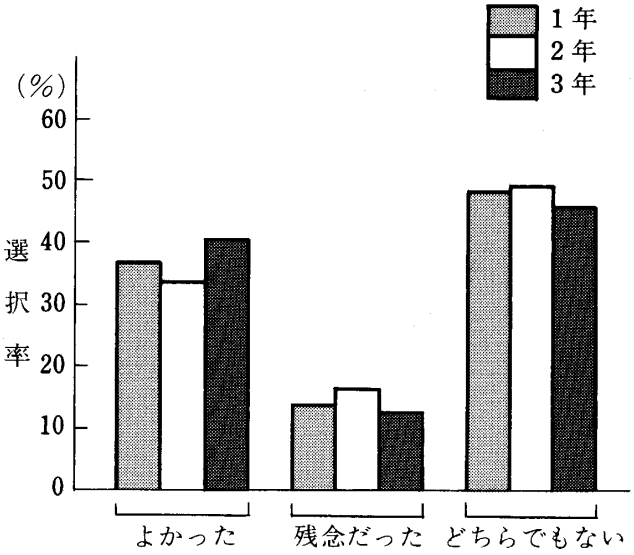

図10　「女子」に生まれたこと

【結果と考察】

1．　女性性受容の方向

女子中学生は，自己の性をどのように受けとめているのだろうか。**図10**は，その回答結果を選択肢および学年別にまとめたものである。自己に与えられた性を「よかった」と積極的に受容している者は，1年生37.4％，2年生33.9％，3年生40.9％で，中でも受容率が2年生に低く3年生に高いが，その比率は学年間に有意でない（$\chi^2=2.69$，$df=4$，$p>.1$）。従って，学年に伴って性受容観が発達するとはいえないが，女子中学生の3割～4割が平均して自己の性を受け入れていることが分かる。この数値は他の調査研究の諸結果と，また男子の傾向に比較して低率であることに相違が認められなかった。

そこで，「よかった」と回答した者にその理由を自由記述させた。記述内容を設定カテゴリーに沿って分類すると，「おしゃれができる」「スカートがはける」といった，いわゆる女性的特性を挙げる比率が各学年とも最も高く，1年生53.8％，2年生42.5％，3年生49.6％であった。こういった女性的特性には，精神的・心理的な側面，生理的・身体的な側面，行動的な側面を考えられるが，先の理由は後者の行動的側面に分類される。彼女達は「やさしさ」「思いやり」を主体とする精神的・心理的な特性に，例えば「子どもが産める」といった生理的・身体的な特性に女性性の力点を主張する以上に，思春期以降に芽生える性的関心に付随する種々の行動に集中しているようである。行動的側面の次に高く挙げているのは，後にも考察するように，女性性ゆえに特別扱いや特別視を受け，そのために得な面が多く存在すると捉えている点である。

一方，女性性に生まれたことを「残念だった」と否定的に認識している者の割合は，相対的に低く有意ではないが，1年生13.9％，2年生16.5％，3年生13.5％で，2年生にいくらか高い傾向が認められる。自己の性を「残念」と認める理由は何だろうか。有効な記述を分析

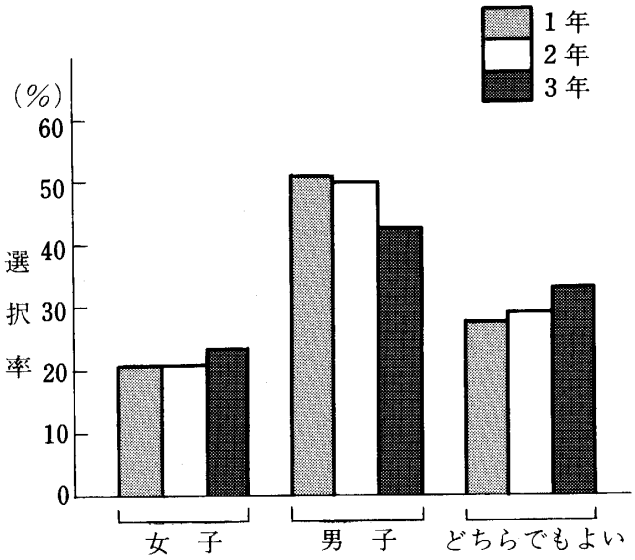

図11　今度生まれ変わるとしたら

すると，1年生「礼儀作法・家事手伝いの強要」，2年生「行動の自由がない，男子は活動的」といった男性的特性の肯定と自己の女性役割強要への反発，3年生「女子のさっぱりしない性格」「陰険，しつっこい性格」などの人格特性を強調しており，学年間に意見の違いが認められる。「どちらでもない」という認識がどの学年でも高く，これをどのように理解するかによって解釈も異なる。態度の未確定を積極的に否定しない点に着目するか，あるいは積極的に肯定していない点に着目するかである。ただ，自己の女性性を自信を持って「よかった」と言い切れない彼女達の理由があるものと思われるが，この点は明かでない。

図11は，もう一度生まれるとしたらとの仮定のもとに，生まれ変わる時の「性選択」の結果をまとめたものである。この種の質問は非現実的な枠を出ないのだが，自己の性の位置づけを知る上で効果的な項目である。図からも明らかな通り学年間に有意ではないが（$\chi^2=3.01$, $df=4$, $p>.1$），「男子」を選択する比率が高く，1年生51.3％，2年生50.4％，3年生43.9％で，「女子」を選択する比率1年生21.3％，2年生20.9％，3年生23.9％を上回っている。異性選択が学年とともに50％台から40％台に減少するのと比較して，同性選択が微少ではあるが増加を示して，女性性を受容する反面「男子になってみたい」とする心理は興味深い。そこで，「男子」と答えた異性選択の理由を内容分析すると，そこから思春期以降の女子心理の一端が浮かんでくる。それは女性性の否定から異性選択を求めたというより，どうも「単に今，女子だから男子を体験したい」「違う立場，観点から物を見たい」といった，いわば好奇心からのもので，1年生45.4％，2年生49.6％，3年生45.7％と各学年とも平均して高くなっている。さらに，男子の「さっぱりした性格」や「行動の自由」という特性に憧れを抱いている。今度は男子になってみて男子のことをよく知りたいと思うと同時に，自分や女子全体の「そうでない性格や行動」を男子はどう思っているのかを気にしているとも理解できる。

これに対して「生まれ変わっても女子」と答えた者は，何らかの意味で「今の生活に満足」

して「楽しく幸せ」と感じている。意識水準は異なると思われるが，1年生43.1％，2年生38.6％，3年生46.2％の数値の中には，異性への関心や異性との性体験の影響と無縁でない要素も含まれるのではないだろうか。また「どちらの性でもよい」とする者は，比較的冷静な目で「女子でも男子でもそれなりに良いところがあり，それなりに短所もある」としながら，男子にもなってみたいが，今度も女子に生まれたら「今と違った生き方」もできるかもしれないと決め兼ね，以下，性を越えた人間としての条件を述べるのである。

性受容と性選択との関係はどうであろうか。前述のように，性選択に「男子」を想定する者が学年を問わず高率になっていたが，女性性を受容した上での異性選択は1年生38.4％，2年生35.9％，3年生28.7％で先の“憧れ心理”を物語るものである。また，態度未決定者が男子を性選択の対象にする割合が，1年生49.5％，2年生47.8％，3年生42.5％を占め，未決定者の半数近くは否定的な性受容観を持つ傾向があると見てよいだろう。その起因については後でも触れるが，女子は男子に比べ日常の言葉づかい，礼儀作法など，全般的でしかも伝統的に女子に期待され固定化された行動形態や性役割の面で制約を多く受けていることが考えられる。ただ，女子中学生という発達段階を考慮すれば，このような歴然とした性差意識や性役割観を背景にした水準よりも，これも後で分析が加えられるように，女性性に生きる現状が得であるのか否かの，どちらかといえば一種の感覚的な水準で捉えていると解釈できないだろうか。現在の性を否定している者が高率で異性を肯定するのはもちろんの傾向である。

では，女子中学生はどのような状態の時に自分を「女子一性」と自覚するのだろうか。有効な回答を分類していくに従って，学年間の特徴が見出された。全体では女性的特性として許容されるカテゴリーに，1年生51.9％，2年生56.3％，3年生59.9％の半数以上が集中する。その中でも，1年生は「生理の時，トイレの時，風呂の時」といった生理的・身体的な側面に21.6％を示し，以下「男子を好きになった時」「泣いた時」といった情緒的な側面や「礼儀作法，家事手伝いをさせられた時」が続いている。2年生は「鏡を見る，髪の毛の手入れ，おしゃれなどをする時」といった女性に特有の行動に26.5％，3年生は生理的・身体的な側面に23.9％，女性的行動に21.3％の比率を示し，いずれも何を基準に性判断をするのかを理解する上で価値の高い内容と思われる。

2．親からの性役割期待と行動制限

人間は誕生から現在まで，その時々において実にさまざまな地位を占めている。女子中学生も例外でなく，家庭にあっては子ども，特に“女の子”としての行動や態度を求められることが多い。そこでの彼女達に割り当てられた役割には，女性性のために親から期待されるもの，そして女性性のために親から制限や禁止を受けるものが顕著である。親の役割期待に沿う時，それは女子として好ましい行動や態度とされ，反対に役割期待に合致しない，あるいは対立する場合には女子らしくないという評価が形成され定着してくる。彼女達は親や世間一般からどのように見られていると自認しているのだろうか。また，女子として特に親から教育や躾の面

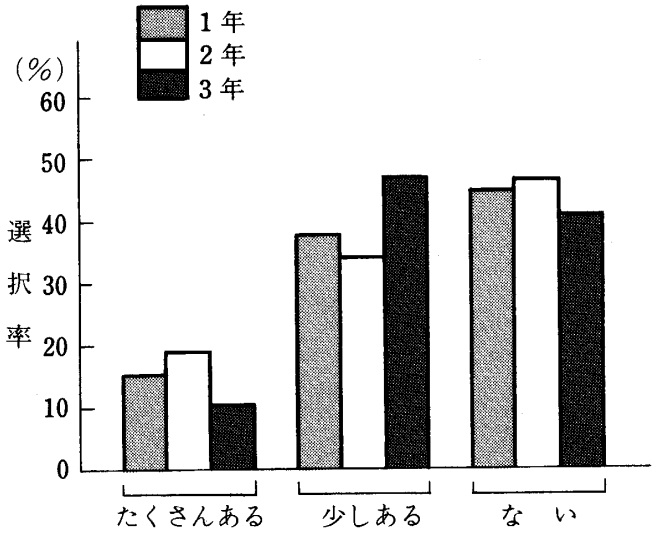

図12　「女子だから」といって親から特別にさせられたこと

で特別扱いを受けた経験はあるのだろうか。

図12は，女子という性のために親から特別にさせられたことがあるかについて，その傾向比率を示したものである。図中の「たくさんある」と「少しある」を加えると，1年生54.2％，2年生53.5％，3年生58.8％で，各学年とも半数以上の者が親から何らかの要請を受けていることが分かる。学年平均では55.5％の者が経験を持ち，その記述内容を平均して分析してみると，「女子だから」という理由で「家事手伝い」を特別にさせられたと答えた者が49.0％と圧倒的に多い。続いて「礼儀作法の強要」や「言葉づかい・態度の注意」の20.6％で，それ以外の分類項目には大差が見られない。ただ「お稽古ごと」は3年生に多く，また「夜の外出禁止」や「帰宅時間の制限」頻度も3年生に多い。親自身の役割期待と同時に，親に普遍的な心理的不安が交錯しているのだろう。そのためか，興味深い点は「女子」なるが故に親からいろいろかばってもらう経験もあるらしく，これは低学年の者ほど多かった。学年による親心理の視点に相違が存在するのかもしれない。

一方，**図13**は女子という性のために親からさせてもらえなかったことの結果である。上記と同様に，図中の「たくさんある」と「少しある」の合計は，1年生33.5％，2年生37.4％，3年生39.6％と，わずかではあるが学年進行とともに増加傾向を示している。親からさせてもらえなかった以上に，させられたことが多いと彼女達が指摘している点に注目したいと思う。さて，女子ゆえに受ける行動制限の種類を設定カテゴリーにおいて分析すると，平均して最も比率の高い項目は「夜の外出制限」の28.2％で，続いて「日常行動の制限」の22.4％，「自由な礼儀作法・態度の制限」の11.8％，「男子的行動の禁止」の10.6％，「スポーツの制限」の9.8％などの順であった。学年が進むにつれて外出や行動の制限が増え，礼儀作法や態度への容認が減少している。

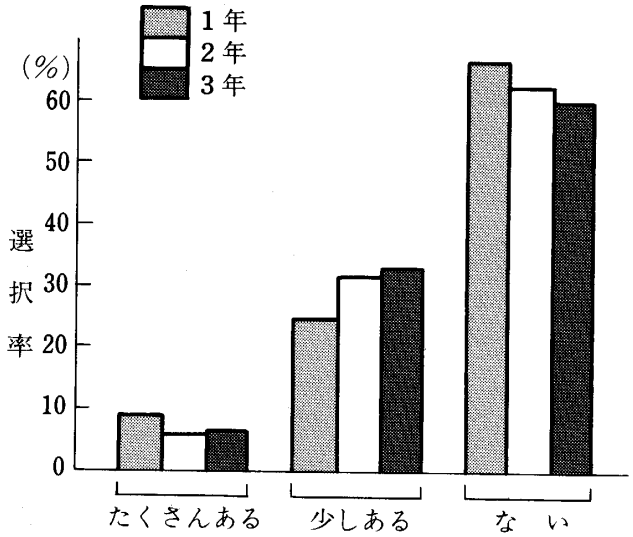

図13　「女子だから」といって親からさせてもらえなかったこと

3．女性役割の評価

前述の設問に対する女子中学生の認識の中で，自己の女性性をどちらかといえば否定的な意図を持って捉えている状況を見てきた。その際に，彼女達の性役割意識の機序が，いわゆる伝統的な性役割観の上に形成されたと見るより，思春期特有の感覚的で，自己の日常生活を営むのに有利な展開となるか否かの観点によると指摘した。従って，それは「得―損」の水準で性役割を評価しているといえるだろう。

図14は，女子として得をしているかの回答比率をまとめたものである。図中の「たくさんある」と「少しある」を加えた割合は，1年生の46.5％において女子として種々の面で得をしていると考える者が最も多く，2年生38.3％で下がり，3年生で再び上昇することが明らかになった。有意とはいえない（$\chi^2=4.14$，$df=4$，$p>.1$）が，「女子だから得」という意識

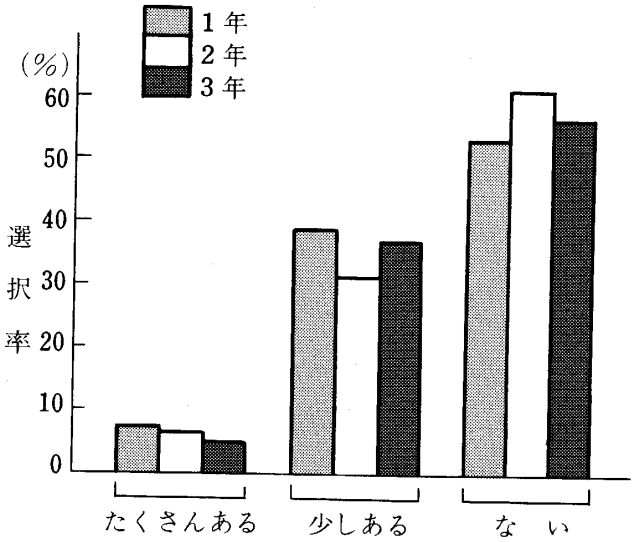

図14　「女子だから」といって得をしていること

は，2年生において他の学年に比較すると肯定する割合が低いようである。そこで，「得である」と考える場合に彼女達は何を指しているのかを自由記述させた。各学年とも比率の高かった内容は「男子との比較の上で特別扱いされる」ことで，1年生55.2％，2年生40.3％，3年生63.6％になり，3年生に最も高く2年生に低い。また，誰からその扱いを受けるかについての順位を調べると，1年生では「教師」「一般のおとな」の順，2年生，3年生では「一般のおとな」「親」の順であったが，特に3年生は「一般のおとな」から優先的に特別扱いを受けていると認める者が59.9％の高率である，反対に「教師」から受けるとする者はわずか3.6％であった。他の男子から受ける割合は2年生の13.8％を筆頭に各学年とも大差ない。次に多かったのは，いわゆる「女子らしさ」の特性の指摘で，2年生の30.6％が，1年生16.7％，3年生15.9％を大きく上回っていて，2年生の心理的変化の一端がうかがえると思う。3年生になるに従い，親を含めたおとなから男子に対してより優先的に特別扱いを受けることで，自己の性役割を得と判断するようである。ただし教師に関してはそうでないらしいので，その点を強調しておきたい。

次に，自己の女性性に関わる性役割や求められる性役割期待を損と考えるかについて，**図15**にその集計結果を示した。同様に「たくさんある」と「少しある」に評定した比率を合計すると，1年生52.6％，2年生50.4％，3年生49.6％で，学年間に有意な差は認められない（$\chi^2=1.04$，$df=4$，$p>.1$）が，徐々の減少傾向は見られる。なお，上記の性役割に得があるとした者で同時に損もあると答えた者は，1年生66.4％，2年生72.7％，3年生63.4％で，彼女達は“得―損”の両極性の存在を強く感じているだけでなく，質問の1つひとつに敏感に反応する姿が浮かんでくる。2年生にそれが高いのは特徴的である。そこで，有効な自由記述の中から損と意識する点をまとめた。1年生では行儀，姿勢，言葉づかいという「礼儀作法の強要」に25.4％，「家事手伝いの強要」に14.9％を示し，2年生では外出や遊びなど

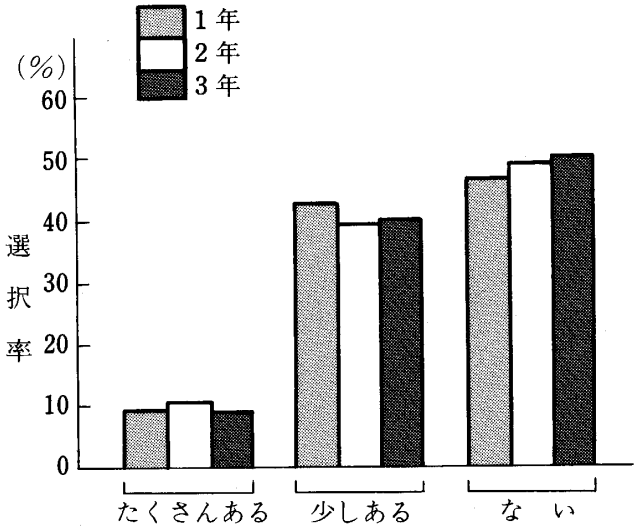

図15　「女子だから」といって損をしていること

に対する「行動への干渉」に25.0％,「礼儀作法の強要」に21.9％，3年生では「行動への干渉」に29.9％,「礼儀作法の強要」に19.6％などの順になっていて，学年とともに「礼儀作法や家事手伝い」を否定的に認める傾向が高率ではあるが徐々に減少し，反対に「行動への干渉」をうるさく思う思春期特有の傾向が上昇している。その他，目立った特徴として，1年生は野球，サッカーなど「特定の運動ができない」に14.0％，2年生は生理現象，トイレ，妊娠など「生理的なハンデ」に13.5％，3年生は就職，地位など「女性の社会的存在の低さ」に15.9％を，他の学年に比較して損であると理解する。3年生は進路選択の時期にも当たり，女性の社会的地位の低さを現実社会の中で発見し始めているのだろうか。こういった不満は，例えば「ダメな男子は女の腐った奴といわれるが，女子はダメな男子と同列なのか」という悲痛な訴えにも見られ，これからは男子の取る女子の位置づけを今一度熟考しなければならないだろう。

4．男子志向への葛藤

最後に，ここでは女性役割の評価という観点から，男性役割や役割期待に対する女子中学生の見方へその視点を移してみよう。具体的には「男子はいいな」あるいは「男子でなくてよかった」と思う複雑な心理過程を捉えようとする。

図16からも明らかなように,「男子はいいな」と思うことがあると答えた者は，1年生62.6％，2年生51.7％，3年生61.3％と変化し，2年生で有意に低くなっている（$\chi^2=12.90$, $df=4$, $p<.05$）のに対し,「どちらでもない」とする比率は2年生に高くなっている。これらの男子志向と「生まれ変わる時の性選択」との関係を調べると,「男子はいいな」と思い「生まれ変わるとしたら男子」と回答した比率は，1年生70.3％，2年生68.9％，3年生75.3％で，3年生は異性選択率こそ他の学年に比較してやや低いが，両者の一貫性は高いようである。自由記述の内容を分析してみると,「男子のよさ」について1年生は「性格」に

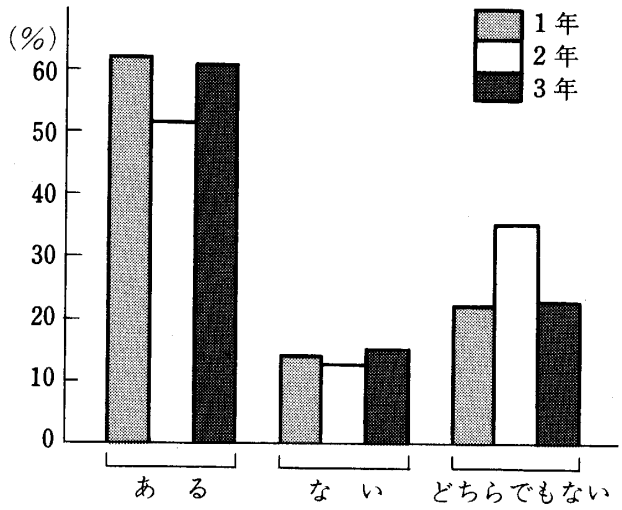

図16　「男子はいいな」と思うこと

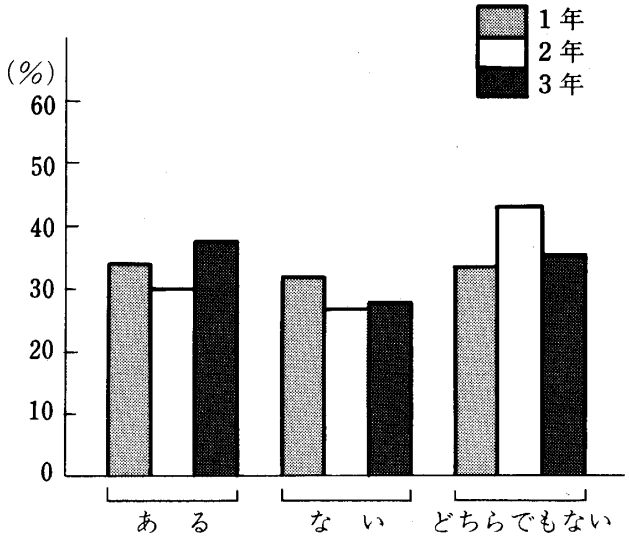

図17　「男子でなくてよかった」と思うこと

24.5％,「行動の自由」に19.6％,「運動能力」に16.8％，2年生は「行動の自由」に28.1％,「性格」に19.3％,「友達関係」に14.9％，3年生は「性格」に27.9％,「友達関係」に18.6％,「行動の自由」に18.6％などを挙げている。女子中学生は，男子に容認された「行動の自由」をうらやみながら，男子の「さっぱりした性格」と「オープンな友達関係」に好感や憧れを持ち，同時に女子の「うじうじした性格」を嫌うと自認している。ある女子は次のような感想を述べている。「休み時間に遊ぶ時など，男子は外に出てバスケットなどをやって汗をかいたりしてすごく楽しそうなのに，女子はいくら誘っても外で遊ばず，暗く部屋で話したりしている時，男子はいいなあと思う」と。まさに,『男子は夕立，女子は霧雨』なのかもしれない。

他方,「男子でなくてよかった」と思う傾向は，**図17**のように1年生34.4％，2年生30.0％，3年生37.4％を示し，有意ではない（$\chi^2=6.42$，$df=4$，$p>.1$）が，いずれもそれを否定する比率を上回っている。その理由を分析すると，学年が進むにつれて男子は「戦争に行かねばならない」「責任が重い」「一生働く」「妻子を養う」といった，いわゆる男子に要請された社会的責務―役割期待と受け取れる事柄に対して，自分が女子であるが故に免れる利点を認めている。この傾向は，1年生24.4％，2年生43.4％，3年生61.5％と，学年とともに急上昇を示すのである。

V．研　究　III[15)]

【研究の目的】

本研究は女子青年の中から発達段階では青年後期にあたる女子大学生を対象にして，①彼女達の女性性受容の方向を調査し，②彼女達が日常意識化しているopen-endな女性像（女性か

表8　調査用紙の概要

質問1	あなたは「女子（女性）」に生まれてよかったと思いますか。 ア．よかった　　イ．残念だった
質問2	今度，生まれ変わるとしたらどちらの性になりたいと思いますか。 ア．女子（女性）　　イ．男子（男性）
質問3	つぎの「女子（女性）は……」のあとに，思いついた言葉（文章）を20通り書いてください。 1．女子（女性）は＿＿＿＿＿＿ 2．女子（女性）は＿＿＿＿＿＿ 3．女子（女性）は＿＿＿＿＿＿ 〜 20．女子（女性）は＿＿＿＿＿＿

らみた女性役割）を捉え，③女性性受容と女性像との関係を検討することが目的である。ここで女性性受容の方向によって，女性像の肯定的な側面と否定的な側面にどのような差異がみられるかを明らかにしたいと考える。

【研究の方法】

1．調査対象者　東京都および埼玉県に通学する女子大学生1，2年生で，集計される最終的な対象者数は298名である。

2．調査材料　調査のための質問項目は，性差および性役割の方向の中から本研究の目的に沿うように，**表8**に示す主として3種類の項目で構成されている。若干の説明を加えよう。

(a)質問1は，女性性受容の傾向を測定するために，従来から用いられてきたものである。

(b)質問2は，現実の女性性受容の程度を多角的に捉えるために設定された。この種の質問は非現実的な枠を出ないのだが，自己の性の位置づけを知るうえで効果的な項目である。

(c)質問3は，女性像を広く捉えるために用意されたもので，Kuhn, M.の創始した20答法（Twenty Statement Test）を参考にしている。20答法は，本来，個人の自己意識や自己概念を測定するための方法として開発されたものである[16]。それは「私は」という言葉に続いて，20通りの異なる自己についての答えを書いてもらうことで，自己に関する多様な側面を分析しようとする。回答は個人の自由裁量に任されるため，厳密な意味での統計的な処理は難しいが，個人的文脈を広く社会的文脈に対応させて知ることができるので，心理学上の利用価値は高いと思われる。本研究では，この20答法の枠組みを応用して「女子（女性）は」のあとに20通りの異なる女子（女性）について記述を求めることにした。

3．手続き　調査は通常の講義時間に行われた。質問1と質問2は，どちらかを選択するように指示し，選択の理由がある場合には余白に書いてもらった。質問3については，特別な時間制限を設けないが，必ず20通りの女性像を記述するように教示した。

4．集計　得られた調査資料は，質問1と2での単純集計を基に，質問3との関係でクロス集計を施した。本来の20答法の分析では，例えば，①合意反応・非合意反応，②ローカ

表 9　女性性と性再生との関係（N＝298）

	女性―再生	男性―再生	計
よかった 女性性肯定	170 (57.0％)	85 (28.5％)	255 (85.6％)
残念だった 女性性否定	2 (0.7％)	41 (13.8％)	43 (14.4％)
計	172 (57.7％)	126 (42.3％)	298

ス・スコア（locus score），③特定反応の出現，④記述項目の内容分類，⑤回答内容の心理的負荷などが知られている。本研究では，上記の分類を参考にしながら，いくつかの分析カテゴリーを設けて量的に集計した。

【結果と考察】

1．　女性性受容と性再生との関係

表 9 は，女子大学生 298 名が，①現時点で女性性役割を受容するか否か，②女性性役割を将来も受容するか否かの結果をまとめたものである。ここで，「女子（女性）に生まれてよかった」にチェックした者を「女性性肯定」，反対に「女子（女性）に生まれて残念だった」にチェックした者を「女性性否定」とした。また，「今度，生まれ変わるとしたら女子（女性）」にチェックした者を「女性―再生」，反対に「今度，生まれ変わるとしたら男子（男性）」にチェックした者を「男性―再生」とした。

女子大学生は，自己の性を肯定的に捉える傾向が強いようで，全体の 85.6％が「女性に生まれてよかった」と女性性に与えられた役割をポジティブに捉えている。この数値は，過去に調査した結果（大学 1 年生で 55.0％，4 年生で 59.8％）よりも遙かに高い。これは「どちらでもない」という緩衝的な選択肢がなかったことと，彼女達の生活経験の満足性に由来していると思われる。実際にその理由をまとめてみると，①「女性は得である」という周囲からの特別視・特別扱いによるもの，②「男性のような社会的責任から免除される」という男性役割の躊躇，③「子どもが産める」「やさしい・思いやりがある」「おしゃれができる」という女性に与えられた特性の肯定，④「今の生活に満足し，女性が好き」という社会性を背景とした認識などに分類されることからも理解できる。

一方，性再生の意識では，「女性―再生」57.7％，「男性―再生」42.3％が接近している。同性（女性）を再生する理由は，上記の女性性受容と類似して，①「今の生活に満足している」が最も多く，以下，②「社会的責任が免除される」，③「得である」などが続いている。反対に，異性（男性）を再生する理由は，①「現在，女性だから今度は男性を体験したい」「違う立場，観点から物事を見たい」という両価値的な志向，②「男性は自分の好きなことができる」「男性は能動的な行動ができる」「できなかったことにチャレンジできる」「自分を生

かせる仕事に打ち込める」といった，これからの社会生活を営む上で女性であるが故の不満などに基づくことが多い。

そこで，表9のクロス集計の結果を見ると，「女性性肯定」で「女性―再生」を選択した比率が最も高く全体の57.0％，次に「女性性肯定」で「男性―再生」が28.5％，「女性性否定」で「男性―再生」が13.8％などの順になっている。各細胞の出現率の差はもちろん有意（$\chi^2=57.98$，$df=1$，$p<.01$）であるが，「女性性肯定」が必ずしも「女性―再生」にならないところに，彼女達のアンビバレントな感情がうかがえる。

2．20答法に現われた女性像の位置

調査対象者全員が20種類の女性像を記述した後に，「あなたが書いた20通りの回答の中で，女子（女性）にとって最も重要で好ましいもの（女性の特徴をよく現わしているもの）を1つ選んで○印をつけてください。反対に，全く重要でなく好ましくないもの（女性の特徴をよく現わしていないもの）を1つ選んで×印をつけてください」という旨を教示した。**図18**は，全対象者298名の結果である。○印あるいは×印がついた20答中の位置を，仮説的ではあるが5答ずつに分けて示した。図中の□は○印，■は×印がつけられた比率である。肯定的な女性像は，1～5答の中に44.3％（その後は，25.8％→13.4％→16.5％）が入るが，否定的な女性像は20答が進む（14.4％→22.5％→30.9％→32.2％）につれて増大する。これは，大変興味深い結果と思われる。つまり，調査対象者である女子大学生が自身の性についてのイメージを求められると，比較的前半にポジティブなものが先行することを意味するが，女性性を肯定した人数が多いこととも無関係ではないだろう。そこで，質問1，2との関係（女性性と性再生との関係）をクロスさせたものが**表10**である。表欄外の（注）にもある通り，①③⑤⑦は肯定的な女性像として選択されたもの，②④⑥⑧は否定的な女性像として選択されたものである。特に①と③とを比較すると，全体の頻度は異なるが，女性性についてのよいイメージが女性性肯定者の前半に生じやすいことが理解できる。

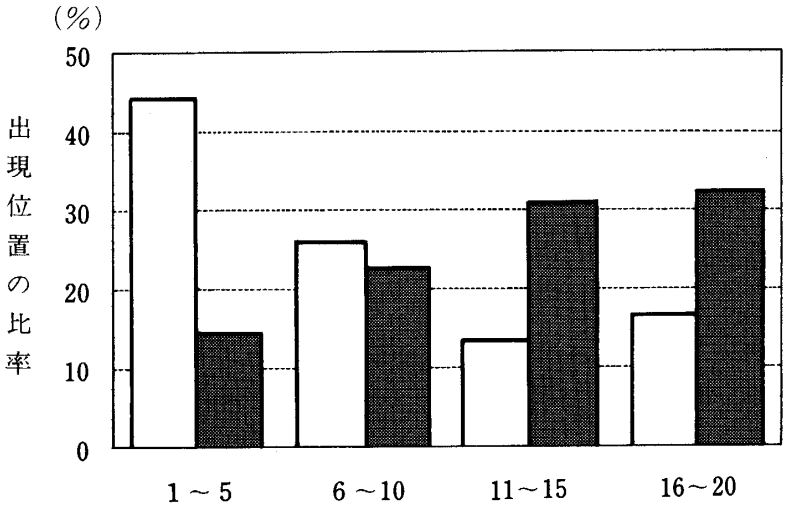

図18　女性像の肯定・否定の出現位置（全体）

表 10　20 答法に現われた女性像の位置と性意識との関係（頻度）

位置＼女性像	女性性肯定		女性性否定		女性一再生		男性一再生	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1～5	120	35	12	8	78	23	54	20
6～10	64	57	12	10	43	36	34	31
11～15	31	82	10	10	22	59	18	33
16～20	40	81	9	15	29	54	20	42
計	255	255	43	43	172	172	126	126

（注）①③⑤⑦は，肯定的な女性像として選択されたもの。
②④⑥⑧は，否定的な女性像として選択されたもの。

3．20 答法に記述された女性像の内容

次に，ここで先に述べた女性にとって最も“重要―重要でない”選択回答（○印と×印がついたもの）の記述について集計した。**表 11** は肯定的な女性像，**表 12** は否定的な女性像の結果をまとめたものである。集計にあたっては，過去の研究[17]や予備調査などを参考にして，あらかじめ出現頻度の高い回答項目をカテゴリー化することに準拠した。表 11 の肯定的な女性像で最も頻度が高かったのは，「子どもを産む，母親になる」22.1％という女性役割の典型的なカテゴリーであった。当然といえば当然のことであるが，思いつくであろう女性役割についてのイメージの中で，「出産と育児」という概念が最も強いインパクトを女性自身に与えていると解釈できる。さらに，表 11 のカテゴリーで類似の項目を集めると，女性は「やさしく，明るく，親切で，思いやりがあって，美しく，かわいい」という性格的・外見的な特性が，①で 42.0％，②で 37.2％，③で 37.8％，④で 46.0％，⑤で 38.2％，⑥で 49.4％，⑧で 39.0％，全体で 41.3％である。女子大学生は，かなり現実的で固定的な観念を持って自身の

表 11　肯定的な女性像として記述された内容（頻度）

女　性　像	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計
(a)　子どもを産む，母親になる	54	12	41	25	41	13	－	12	66
(b)　やさしい	49	4	36	17	36	13	－	4	53
(c)　明るい，親切，気がつく	26	7	14	19	14	12	－	7	33
(d)　男性・他者への意識，依存	16	3	13	6	13	3	－	3	19
(e)　思いやりがある	13	1	6	8	6	7	－	1	14
(f)　女性らしく生きる	11	1	6	6	6	5	－	1	12
(g)　美しい，きれい	9	3	5	7	5	4	－	3	12
(h)　かわいい	10	1	4	7	4	6	－	3	11
(i)　家庭的である	4	1	5	－	4	－	1	－	5
(j)　結婚と人生の変化	2	2	3	1	2	－	1	1	4
(k)　その他	61	8	39	30	39	22	－	8	69

（注）①性肯定　N＝255，②性否定　N＝43，③女性再生　N＝172，④男性再生　N＝126，⑤性肯定―女性再生　N=170，⑥性肯定―男性再生　N=85，⑦性否定―女性再生　N=2，⑧性否定―男性再生　N＝41。

表 12　否定的な女性像として記述された内容（頻度）

女　性　像	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計
(a)　社会的行動・対人関係	57	11	40	28	40	17	−	11	68
(b)　性格特性や態度	57	5	38	24	38	19	−	5	62
(c)　外見的な装飾や容貌	33	9	23	19	23	10	−	9	42
(d)　身体的・生理的な側面	36	4	20	20	20	16	−	4	40
(e)　日常の生活経験	21	4	14	11	14	7	−	4	25
(f)　家庭環境・躾・社会的制約	10	6	8	8	7	3	1	5	16
(g)　能力・知性・思考	7	−	4	3	4	3	−	−	7
(h)　年齢による変化	3	2	2	3	2	1	−	2	5
(i)　その他	31	2	23	10	22	9	1	1	33

（注）①性肯定　N = 255，②性否定　N = 43，③女性再生　N = 172，④男性再生　N = 126，⑤性肯定―女性再生　N=170，⑥性肯定―男性再生　N=85，⑦性否定―女性再生　N=2，⑧性否定―男性再生　N = 41。

女性像を評価し，女性役割を位置づけているものと推測される。

これに対して，否定的で好ましくない感情を伴う女性像については，同種の回答が少ないので大きなカテゴリーで分類した。表 12 の(a)〜(i)までがそれである。全体で「集団を組んで，おしゃべりが好き」という社会的な側面に 22.8 %，「陰険，わがまま，ずるいくせに臆病」という性格的な側面に 20.8 %，「おしゃれや化粧にこり，容姿を気にする」という外見的な側面に 14.1 %，「体格や体力，生理的に弱者」という身体的な側面に 13.4 %などに対して，女性像としてのネガティブなイメージを抱いている。このような評価は，日常の彼女達が精神的に，そして他者，特に自分自身の人間関係において感じている点なのかもしれない。

VI.　研　究　IV[18)]

【研究の目的】

研究IIIにおいて，女子大学生の性役割に対する心理構造を従来の研究方法と異なる手続きによって検討した。そこでは，①彼女達の女性性受容の方向を基準に，②彼女達が日常意識化している広範囲な女性像を捉え，③女性性受容と女性像との関係を明らかにする目的で，具体的には Kuhn, M. による 20 答法の理論を参考にして，女子(女性）について 20 通りの回答を求めて比較した。研究IIIでは，特に内容にチェックが加えられた“重要―非重要”な項目を取り上げて，各カテゴリーごとの出現率を分析した。研究IVでは，20 答に現われたすべての回答内容を女性性の受容と非受容との観点から比較することが目的である。

【研究の方法】

1．　調査対象者　　ここでの調査対象者は研究IIIと同一の女子大学生で，東京都および埼玉県内に通学する 298 名である。

2．　調査材料と手続き　　データについても研究IIIと同一である。

3．集計　上記の調査対象者の中から「女性に生まれてよかった」と回答した者を43名，「女性に生まれて残念だった」と回答した者を43名，合計86名を選び分析対象にした。

【結果と考察】

1．分類カテゴリーの設定について

記述された女性像の内容をいくつかのカテゴリーに分類するが，ここでは研究IIIの結果に基づいて合計13種類を決定した。具体的な記述を示しながら提示してみよう。

(a) 否定的な性格特性や態度：陰険である，わがままである，ずるい，ずうずうしい，生意気である，自己中心的である，嘘つきである，などの記述。

(b) 肯定的な性格特性や態度：やさしい，明るい，強さを持っている，気配りをする，思いやりがある，親切である，素直である，などの記述。

(c) 外見的な装飾や容貌：美しい，きれい，かわいい，おしゃれができる，華やかである，身だしなみに気をつける，お金がかかる，などの記述。

(d) 身体的・生理的な側面：生理がある，子どもを産む，母親になる，冷え性である，力がない，行動がにぶい，などの記述。

(e) 日常の生活習慣や経験：食事の支度をする，掃除をする，洗濯をする，子育てをする，買物をする，料理が好きである，などの記述。

(f) 他者への依存・甘え：他者に守られる，他者に頼れる，などの記述。

(g) 家庭環境・躾・社会的制約：礼儀作法や躾がきびしい，制限が多い，男性に比べて地位が低い，重要視されない，仕事が制限される，などの記述。

(h) 能力・知性・思考：賢い，頭がいい，仕事ができる，字がきれい，などの記述。

(i) 恋愛や結婚への過程：男性との恋愛関係や結婚を前提とした記述。

(j) 家族や友人との関わり：家族との絆や友人との仲間意識などに関する記述。

(k) 社会への進出・自立：女性も自立すべきである，仕事や生き甲斐を持つべきである，などの記述。

(l) 加齢による変化：寿命，長寿，加齢による心身の変化，などの記述。

(m) その他。

である。この分類はあくまでも仮説的なものである。**表13**は，上記のカテゴリーに基づいて回答内容を分類したものでる。20答を5答ずつに分け，それぞれの位置に(a)〜(m)がどの程度分布するのかをまとめて分析した。

2．出現位置と女性像との関係

まず，全体（総数は86人×20答＝1720）を通して見ると，女性像として一番多かったのは，受容群も非受容群も「陰険で，わがままで，自己中心的」といった(a)否定的な性格特性や態度のカテゴリーに入るもので，両群ともそれぞれ20.2％，21.5％となり，両群に有意な差は見られなかった。これに対して「やさしく，明るく，思いやりがあって，親切」などの(b)肯定的

表 13　女性像として記述された内容

女性像＼指標	1～5 ①	1～5 ②	6～10 ①	6～10 ②	11～15 ①	11～15 ②	16～20 ①	16～20 ②	1～20 ① 計	1～20 ② 計
(a) 否定的な性格特性や態度	23	54	44	49	61	41	46	41	174	185
	(13.2)	(29.1)	(25.3)	(26.5)	(35.1)	(22.2)	(26.4)	(22.2)	(20.2)	(21.5)
(b) 肯定的な性格特性や態度	64	44	34	17	29	25	23	22	150	108
	(42.7)	(40.7)	(22.7)	(15.7)	(19.3)	(23.2)	(15.3)	(20.4)	(17.5)	(12.6)
(c) 外見的な装飾や容貌	46	35	31	40	28	39	35	35	140	149
	(32.9)	(23.5)	(22.1)	(26.8)	(20.0)	(26.2)	(25.0)	(23.5)	(16.3)	(17.3)
(d) 身体的・生理的な側面	31	25	22	27	11	23	17	20	81	95
	(38.3)	(26.3)	(27.1)	(28.4)	(13.6)	(24.2)	(21.0)	(21.1)	(9.4)	(11.1)
(e) 日常の生活習慣や経験	7	7	22	14	16	20	16	15	61	56
	(11.5)	(12.5)	(36.1)	(25.0)	(26.2)	(35.7)	(26.2)	(26.8)	(7.1)	(6.5)
(f) 他者への依存・甘え	12	4	9	6	18	9	15	8	54	27
	(22.2)	(14.8)	(16.7)	(22.2)	(33.3)	(33.3)	(27.8)	(29.7)	(6.3)	(3.1)
(g) 家庭環境・躾・社会的制約	7	22	16	17	10	13	14	21	47	73
	(14.9)	(30.1)	(34.0)	(23.3)	(21.3)	(17.8)	(29.8)	(28.8)	(5.5)	(8.5)
(h) 能力・知性・思考	3	5	14	11	14	14	10	10	41	40
	(7.3)	(12.5)	(34.2)	(27.5)	(34.2)	(35.0)	(24.3)	(25.0)	(4.8)	(4.7)
(i) 恋愛や結婚への過程	6	4	9	11	9	10	11	14	35	39
	(17.1)	(10.3)	(25.7)	(28.2)	(25.7)	(25.6)	(31.5)	(35.9)	(4.1)	(4.5)
(j) 家族や友人との関わり	6	6	6	16	9	7	12	17	33	46
	(18.2)	(13.0)	(18.2)	(34.8)	(27.3)	(15.2)	(36.3)	(37.0)	(3.8)	(5.3)
(k) 社会への進出・自立	8	5	2	4	4	4	3	3	17	16
	(47.1)	(31.2)	(11.8)	(25.0)	(23.5)	(25.0)	(17.6)	(18.8)	(2.0)	(1.9)
(l) 加齢による変化	0	2	3	3	4	8	8	7	15	20
	—	(10.0)	(20.0)	(15.0)	(26.7)	(40.0)	(53.3)	(35.0)	(1.6)	(2.3)
(m) その他	2	2	3	0	2	2	5	2	12	6
	—	—	—	—	—	—	—	—	(1.4)	(0.7)

(注) (1) 1～5，6～10，11～15，16～20 の指標は 20 答の中の位置を現わす。
(2) ①は女性性の受容者を，②は女性性の非受容者を現わす。
(3) 表中数字の上段は頻度を，表中数字の下段括弧内は％（頻度計を基準にする）を現わす。

な性格特性や態度のカテゴリーは，両群で比較的大きな差が見られる。受容群は，肯定的な女性像をイメージしやすい傾向にあるのかもしれない。さらに，(c)外見的な装飾や容貌を加えた(a)(b)(c)で，全体の 50 ％以上を説明してしまう。女子大学生から見た女性像は，女性自身が持っている性格特性や態度と外見的な側面というところから，先ず視線を向けるらしい。

次に，出現位置との関係で見ると，非受容群は(a)や(g)社会的制約の有無を，受容群よりも回答の初期にイメージ化する傾向がありそうである。おそらく，社会や家庭などにおける種々の制限や礼儀作法の強要を否定的に捉えることが，ネガティブな女性像を映し出すのだろう。20 答の後半で回答に苦労するあたりから，初期に書いた内容を繰り返したり，身近な生活体験などへの記述が目を引くようになってくるのである。

Ⅶ. 結　語

本研究は，幅広い観点から児童や青年の性差意識を調査し，その現象的な意識内容を明らかにしようと試みたものである。従来の，特に性役割研究では，厳密な統計的手法を用いて性役割スケールを開発し，それによる性役割観や性役割行動の心理学的意味が測定・評価されてきた。本研究もその過程の一環として自己の「性」に対する認識，特に判断の前提になる自己意識の根拠を把握したいと考えた。そして，まず問題提起において性差および性役割の概念についていくつかの先行研究に触れた[19]。

調査結果を概観すると，児童・青年という枠組み以上に，男子・女子という枠組みに性役割研究の到達点が存在するように思われる。ここでは特に“女子という性”を取り上げて考察するが，その一つの例として女子中学生の分析内容から推測されたのは，種々の意味から中学2年生が転換期を形成するらしく，発達的にスムーズな進行を示さないようである。女子が同性よりも異性をポジティブに評価し始める転換期が中学2年生であるとの報告が多い中で，質問方法によってはこの時期以降に女子の卑小感が増大する傾向も見られる。その理由として，例えば女子は将来への展望が持てなくなるとか，対外的に自己表現欲求の増大につながるころなどの解釈が可能かもしれない。自己の女性性を得と感じる反面，それを損とも感じることも多く，実に流動的である。異性への憧れは，単に性的関心や性的興奮から発展した性衝動の対象でしかないのだろうか。

調査の範囲から理解できるのは，例えば「女子に多く期待されている社会的しきたり」に反発し，同時にそれが男子には許されていることへの不満，さらに，男子には比較的容認される「行動の自由」，「男子は夕立，女子は霧雨」に代表される男子特有のさっぱりした性格，男子の「オープンな友達関係」などに対して，女子自身がすでに役割期待を固定化させ，憧れという形で距離感を保とうとしていると思われる。しかし，このような自己の女性役割を積極的に肯定しないことが彼女達の性役割観かといえば，必ずしもそうではない。例えば「戦争」「仕事」「責任」といった本来は平等であるはずの社会的責務が，男性主導で行われている現状を一面で受け入れて，自分が女子であるために免れる利点を，ここぞという時にはっきりと述べており，まさしく彼女達のアンビバレントな感情が表出しているといえるのである。

また，女子大学生の調査から，女性性に生まれたことを肯定する比率が全体で85.6％，その中で将来も女性―再生を意図する者が57.0％見られ，青年後期と児童期・青年前期の者との間に異なる女性役割観の存在することが明らかになった。自身の性を肯定的に捉えるのは，女性に期待されている性格や外見的な美しさ，身体的・生理的な特質を意識する場合に多く現われるようだが，それが否定的な目で捉えられると，女性から見た女性自身のマイナス点となるようである。女子大学生は，大学生としての社会的な地位や現生活の満足性とも関係すると思われるが，自身の女性性にプラスの位置づけを与えたいという意識が認められる。

今後は，多様な回答の相互関連性をさらに検討するとともに，異なる統計的手続きも加味しながら，性差意識や性役割観について一層深い心理学的な意味を追究していく必要があるものと思われる。

（本学講師＝教育心理担当）

〈引用文献〉

1) 大村仁太郎：教育寓話「我子の悪徳」。同文館，1904。
2) 清水弘司：性役割の発達。詫摩武俊・飯島婦佐子（編），発達心理学の展開，新曜社，293-306，1982。
3) 東　清和・小倉千加子：性差の発達心理。大日本図書，1982。
4) 福富　護：性の発達心理学。福村出版，1983。
5) 飯野晴美：性役割という概念の多面性について。心理学評論，27，158-171，1984。
6) Lynn, D. B.：A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. *Psychological Review*, 66, 126-135, 1959。
7) Biller, H. B.：Father dominance and sex-role development in kindergartenage boys. *Developmental Psychology*, 1, 87-94, 1969。
8) 柏木恵子：現代青年の性役割の習得。依田　新・他（編），現代青年の性意識，金子書房，99-139，1973。
9) 福富　護：「らしさ」の心理学。講談社現代新書，1985。
10) 高嶋正士・間宮　武・柏木恵子他：男性・女性・性差の今日的課題。応用心理学研究，7，33-52，1982。
11) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会（編）：現代っ子の性。教育開発研究所，1984。
12) Bem, S. L.：The measurement of psychological and rogyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162, 1974。
13) 藤田主一・高嶋正士・林　倫子：児童における性差意識の特徴(1)(2)。日本応用心理学会第53回大会論文集，130-131，1986。
14) 藤田主一・高嶋正士・林　倫子：女子中学生の性差意識(1)(2)(3)。日本応用心理学会第52回大会論文集，102-104，1985。
15) 藤田主一・高嶋正士：女子学生からみた女性像と性意識との関係。日本応用心理学会第58回大会論文集，70-71，1991。
16) 星野　命：20答法。詫摩武俊（監修），パッケージ・性格の心理6，ブレーン出版，1986。
17) 高嶋正士・藤田主一・林　倫子：女子大学生における性差意識の発達に関する研究。共立女子短期大学家政科紀要，32，129-139，1989。
18) 藤田主一・高嶋正士：女子学生からみた女性像と性意識との関係II。日本応用心理学会第59回大会論文集，75，1992。
19) 間宮　武：性差心理学。金子書房，1979。